

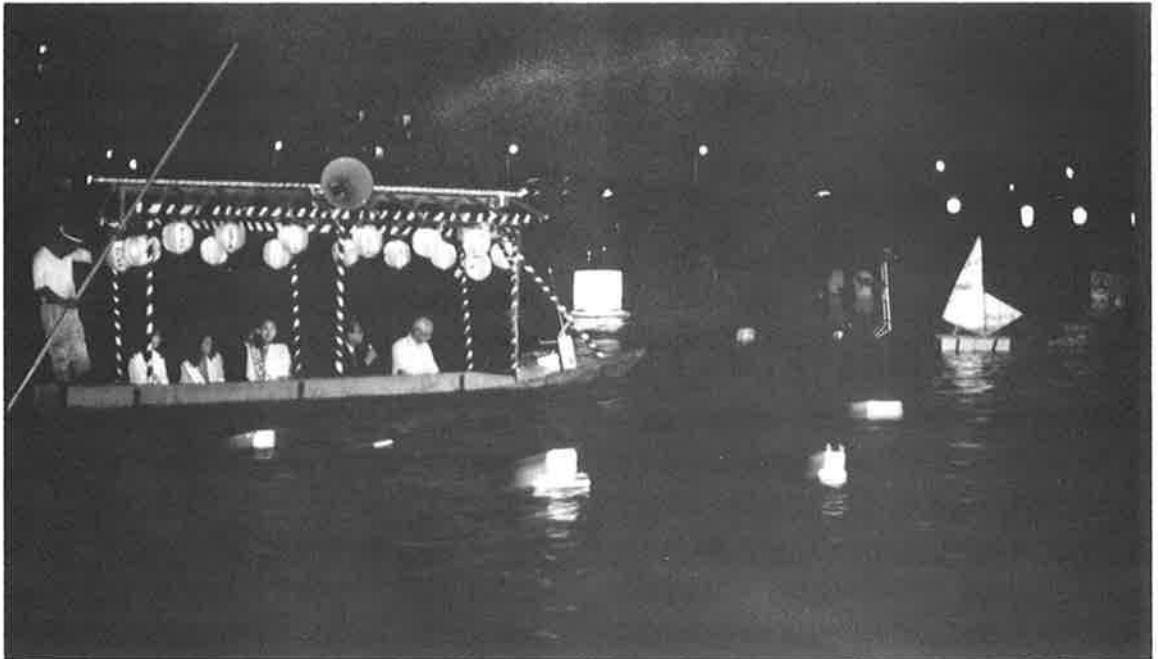
財団だより

# 多 磨 川

1981. 6. 第10号



清流の早瀬に渦を巻いて様々  
ヒゲナガカワトビケラ



二子玉川での灯籠流し

## ■ 多 磨 の 地 名 ■

### ② 多磨の語源

まず古くからいわれている多磨・タバ説とでもいうべきものがある。

『新編武蔵風土記稿』(雄山閣版『大日本地誌大系本』による、以下同じ)多磨郡の総説に

『和名類聚抄』国郡の部に、多磨を訓して太婆と註す。郡名の起る所はさだかに伝へざれど、郡中三田領に、大丹波、小丹波の両村あり、是古へ太婆と唱へしよりとこなるべければ、是より始ともいへり。一説に多磨川の水源は、甲州都留郡丹波山村より出て、郡中に流れ入るゆへ、川の名も丹波川と唱へしより起るともいへど、其の本説さだかならず、後世すべてたまと唱へりとある。

『倭名類聚抄』卷五の国郡部に

武蔵国 国府在多磨郡 管二十一

とあって、21の郡名をあげているが、その中に

多磨 太婆

とある。ただ「太婆」は「タバ」か「タハ」か両用に読めるという。『日本書院』には「婆」を「ハ」とよんだ例もみられるというので、「太婆」すなわち「タバ」と即断できないともいわれるが、多くの用例からみれば、「タバ」とよむようである。

なお次の史料も、平安時代末頃は、「多波郡」であったことを裏づける。

仁安二年定光寺経筒

府中市崎、定光寺(現・常光寺)

敬白南閩浮提日本国武蔵国多波郡定光寺僧知賢

仁安二年歳次丁亥二月二十一日庚寅

(次回続く)

(多磨の地名・保坂芳春・1979・武蔵野郷土史刊行会)



### ● 羽村取水堰付近

東京都高尾自然博物館 新井二郎

川の水の汚れ具合を水生動物の分布からみてみようという友人を手伝って、多摩川を調べまわってから、もう10年近くにもなる。そのときには、もう多摩川の汚れは急速に進んでいて驚いたものである。しかし、意外だったのは、私の生まれ育った羽村町付近の多摩川は、まだきれいである、という結果が出たことであった。もちろん、それは水の中で生活する小さな生き物から判定した結果である。だが、私の目には、子供の頃遊びまわった、あの多摩川にはほど遠い、汚れた川の姿しか映らなかった。

私は、羽村堰の玉川上水取入口のすぐ目の前で生まれ育ったので、ずっと多摩川を見てきたつもりでいた。それだけに、水泳や魚とりなど小さい頃の遊びの場の中心となっていた多摩川は、水量が豊富で澄んだ川の印象が強く、それこそがきれいな川、という規準だと思っていた。ところが、私たちが調べた多摩川は、あの頃とはすっかり変わってしまったのである。

川の水の汚れだけではなく、川原の様子もそうであった。たしか、石ころのゴロゴロしている広々とした川原だったはずだ。それが、今の川原は、

緑が一面に広がる草原といった感じである。その緑も、オオブタクサやアレチウリといった、私が小さい頃には見られなかった植物をはじめとして、その多くは帰化植物であるという。そんな川原の植物の中に、昔から羽村の川原に生き続けてきた植物もかなりある。カワラノギク・カワラハハコ・カワラニガナといった、川原特有の植物である。私がそれを知ったのは、植物にも興味を持つようになった学生の頃である。子供の頃には、石ころだらけの川原を横走るツルヨシ（この名もずっと後になって知ったのだが）のつるをおもしろ半分引張ったぐらいしか、川原の植物については覚えていない。

カワラノギクは、秋に美しい淡紫色の花を咲かせる。石ころがゴロゴロしている川原のあちこちで、このカワラノギクの大きな花を初めて見たとき、どうしてこんなに美しい花を今まで見過していたのか不思議であった。関東・東海地方の大きな川の中流部にしか見られず、多摩川はその最初の報告地である。石ころばかりが目立つ川原に生育しているために、台風などの増水のたびに、川原の様子が変わり、あちこちにその場所を移しながらも、昔からずっと生き続けてきたたくましい植物である。もし、その存続が危うくなるとすれば、それは人間の力が加わることしか考えられない。それだけに、まだかなりのカワラノギクを見ることができる、羽村取水堰付近も安心してはいられない。

羽村取水堰付近は、カワセミも見られるというから、川原の植物とともに水辺の鳥を見るのもよいし、また南の草花丘陵まで足をのぼしてみるのも、自然観察コースとしては、ちょうどよい所である。

私の思い出の中の多摩川とはかなり変わったとはいえ、現在の多摩川からみれば、羽村取水堰付近はきれいな所なのであろう。

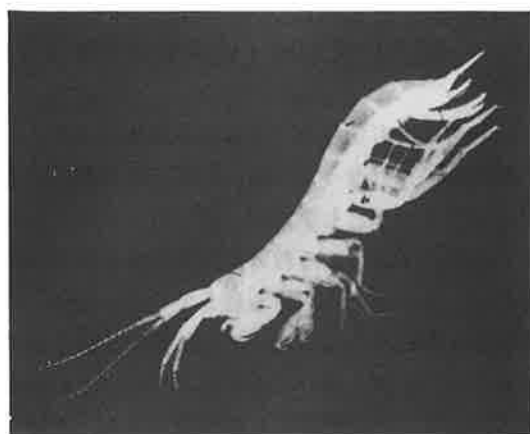
## 私と多摩川

“玲瓏の水、百万の民の生命をつなぐもと、  
流れて止まぬ多摩川の清き朝の面にみよ、  
掬ふに盡きざる無言の訓”

私が昭和10年から5年間を過ごした府立二中の校歌の第一節である。武蔵野の雑木林に囲まれ、奥多摩の山々、遠く富士の麗姿を仰ぎ、多摩川の清流が流れる。校庭には熊谷草が咲き、オオムラサキが飛来する。当時は多摩川原や周辺の雑木林に出ても、現在とちがって自然の移り変わりが非常に豊かに感じられた。私はこのすばらしい自然環境の中で、かなりの時間を散策や自然観察に過ごした。また、新藤先生という、まことに博学でユニークな博物の先生がおられ、しばしば多摩川畔で野外授業を行なわれた。春の一日、万葉の歌などを引用しながらの実物教育は忘れ得ぬ思い出である。個人的には、アユの食餌としての珪藻の分類調査をするようにと勧めた下さったこともあるが、多摩川の自然についてもっと先生の御指導を得ておけばよかったと今にして残念でならない。普段は苦痛でならなかった軍事教練も、多摩川原で行なう時はこわい教官の目もとどかず、結構楽しい時間を過ごした。また、週一回、放課後に全校マラソンがあり、多摩川に沿ったコースを15～20km走った。これは、以降の私の健康にかなりプラスしたと信じている。その外、御岳山の学校林の間伐合宿など、私の中学生生活は多摩川と実に深く密着したものであった。祖母が日野の出身であったため、私は幼少の頃にもよく多摩川で遊んだ。鵜飼を見て、子供心にもいたく鵜に同情したことを覚えている。

戦後、私は都衛研、公害研などで水質の仕事に従事することになったが、多摩川は特に身近に感じられた。そして水質汚濁が進行するにつれ、おこがましくも自分の責任であるかのような錯覚にさいなまれた。そのため、30年頃から、生物の面からの多摩川の調査を始めた。實際上、多摩川の

新日本気象海洋(株)生態室長 松本浩一



メクラヨコエビ

回復に役立てなかったことは、多摩川に対しても都民に対しても申し訳なく思っている。近年、とうきゅう環境浄化財団の研究費を載せ、未調査の水源地域や小支流を調査する機会を得た。さらにすばらしい溪谷景観に接し、数多の貴重な水生生物を採集することもできた。近く多摩川全域の水中生物相をまとめて記録に残す予定だが、それができれば私なりに多摩川に対する義理の幾分かを果たすことができると自ら鞭打っている昨今である。ところで、私の初期の仕事は地下水固有生物に関するものであった。昭和25年頃、立川の井戸中から小さな未知の白色盲目の甲殻類を得て、ニホンメクラミズムシモドキ *Mackinia japonica* と命名し発表した。これが、以後15年間ほぼ全国にわたり井戸の生物を調査するきっかけとなった。この分野でも多摩川は豊富な研究材料を提供してくれた。八王子市の浅川沿いの井戸からは、古生代の化石生物といわれるムカシエビの類など30種におよぶ地下水動物が得られた。これらの多くは私自身または専門学者により新種として命名発表された。

以上のように、私の主な仕事は2つとも多摩川から発し、多摩川をホームグラウンドとして行なわれてきた。私にとって多摩川とは、“掬ふに盡きざる無言の恵”を与えてくれた川なのである。

よみがえ

## 甦れ！多摩川

● はむら子ども会の活動  
(財団研究助成・助成集1979年より)

はむら子ども学校が「多摩川を探険しよう！」の野外活動を行なったのは、昭和53年の夏のことである。この子ども学校は、羽村町公民館が主催する教師と父母による教育問題講座から発展したもので、その年で4回目を迎えている。53年の年間計画を作成するにあたって、特定の子供と長期にわたって学校を開いてみてはどうか、という意見が出され、羽村町を流れる多摩川をもっと詳しく知ろう、自分達の足で歩き川と実際に触れあってみよう、ということでこの企画が生まれたわけである。

羽村町は、玉川上水の取水口がある町で、山あいを流れてきた多摩川が平野部に流れ込むちょうど境にあたる。近年、住宅が増え都市化がここまで波及しているとはいえ、まだまだ流れは清冽で自然も豊かである。しかし、羽村町の子供達は、今では多摩川で泳ぐような事もなく、多摩川の事について知る機会はほとんどないそうである。こうした子供達に「多摩川を探険しよう」と呼びかけたのも、別に具体的な目標があるわけではなくまして環境教育云々といった事でもない。とにかく、多摩川の水源地から河口まで行って見て、何を感じるか、膚でふれてみようという事であった。しかし、ただ単に歩くのではなく、86名の子供達と父母の会を6班に分け、それぞれ何か好きなテーマを考え、班ごとにいくつかの調査を行なってみた。「川の流れの速さを調べる」「川と人間のつながり」、「多摩川の魚」「多摩川の石」「水温のちがひ」など、行く先々でそれぞれの班ごとに思い思いの方法で調べてみた。今回の探険行は日程の関係から、中・下流部はバスでかけ足で回り、主に、水源地帯と上流を歩いてみた。その中で子供達に大きな印象を与えたのは水源林であった。真夏の

日中にもかかわらず、ひんやりとした森林の中、足元の腐葉土がスポンジのようになっぷりと水を含んでいる様子など、探険行の後の感想文の中にも生き生きと描かれている。

「山歩きをして、のどがかわいたとき、冷たい沢の水を飲むと今までのつかれがふっとぶくらいおいしかった」、「犬切とうげから沢を歩いてポタポタたれてくる水源を見てぼくはおどろいた。このたくさんの沢が、川になって多摩川になるとおしえてもらったとき、ほんきにできなかった」等々。小学生がほとんどの子供達の感想は、話して聞いていた事が、本当の事だったという興奮が素直に伝わってくる。彼らの感想文は、財団の一般研究助成66「児童・生徒・地域住民による多摩川流域の状態と水質汚濁の調査」尾島俊夫、1979年、に収録されているが、これは、財団が啓蒙普及的な意味で力を入れている草の根研究のひとつの成果である。現在、多摩川を子供達の体験の場としようとするケースは、徐々に増えてきている。具体的なテーマを持って多摩川に出かけるケースもあるが、このように、とにかく行ってみよう、という事だけでも、子供達にとっては貴重な体験になっているようだ。水温や流れの速度が少しずつ違っている。石の形が千差万別だ。上流の水はとてもおいしいが、下流の水はよごれがひどい。など、感じたこと全てが、次のステップとなっていく。おそらく、多摩川べりのほとんどの小学校では多摩川で泳ぐ事を禁止しているし、近寄る事さえ危険だからという理由で注意している。だから、ほとんどの子供達が、川の事については何も知らないといっても言いすぎではない。だから、何も難しいテーマなどなくても、川に行く事だけでも大きな意味がある。多摩川の環境回復は、息の長い事業である。次の世代に引き継いでもらうためにも、子供達の川離れを少しでもくい止めておかねばならない。

## 《多摩川およびその流域の環境問題に関する調査・研究募集》 第二次

当財団は、昭和52年度から、多摩川流域の地域、地区に密着した点的研究は一般の方々の中にも優れた研究者がいるであろうと考え、毎年、応募をいたしています。

学識者による学術研究をA類研究と呼び、一般の方々の研究をB類研究又は「草の根研究」とも呼んでいます。

今年度は、昭和56年1月末日締切で、第一次のA類、B類研究を募集いたしました。過日、選考委員会を開き、A類研究(新規)8件、B類研究(新規)2件が選考され内定いたしました。B類研究がA類研究に比べ少なく、財団としては、わずか未消化の予算がございますので、出来うれば、B類研究に振り向けたいと考えています。しかし、研究者はどのような研究課題をもって応募されても自由ですので、A類、B類にこだわらず、多摩川およびその流域の環境浄化に役立つ研究をしてみたいと思う方は、財団にお問い合わせ下さい。

年度別応募件数、採用件数・助成金額

年 度	研究 区分	応 募 件 数			採 用 件 数			助成金額 (円)
		新規	継続	計	新規	継続	計	
昭和50年度	A類	7	—	7	6	—	6	9,500,000
	B類	—	—	—	—	—	—	—
	計	7	—	7	6	—	6	9,500,000
昭和51年度	A類	13	6	19	5	6	11	19,994,120
	B類	—	—	—	—	—	—	—
	計	13	6	19	5	6	11	19,994,120
昭和52年度	A類	31	4	35	17	4	21	28,285,010
	B類	8	—	8	6	—	6	1,984,900
	計	39	4	43	23	4	27	30,269,910
昭和53年度	A類	17	14	31	8	14	22	28,401,840
	B類	6	5	11	6	5	11	2,892,500
	計	23	19	42	14	19	33	31,294,340

昭和54年度	A類	19	13	32	11	13	24	36,875,240
	B類	8	5	13	7	5	12	3,381,490
	計	27	18	45	18	18	36	40,256,730
昭和55年度	A類	20	15	35	12	13	25	39,277,250
	B類	10	7	17	7	6	13	2,672,800
	計	30	22	52	19	19	38	41,950,050
昭和56年度 (第1次内定分)	A類	15	13	28	8	13	21	40,601,000
	B類	7	5	12	2	5	7	1,913,200
	計	22	18	40	10	18	28	42,514,200
合 計	A類	122	65	187	67	63	130	202,934,460
	B類	39	22	61	28	21	49	12,844,890
	計	161	87	248	95	84	179	215,779,350

応募についての詳細は下記事務局までご連絡下さい。

〒150 東京都渋谷区渋谷1丁目16番14号(地下鉄ビル内)

電話 (03) 400-9142 (財とうきゅう環境浄化財団)

## 多摩川'81の発刊について

多摩川'81のテーマは、「多摩川浄化対策のゆくえ」と題して編集を行なった。多摩川浄化対策については、一般の方々には、ほとんどなじみのないことばと思われるが、これは、昭和45年頃、つまり今から10年程前、東京都が、多摩川を良くしようとして作成した環境浄化計画のことである。この計画の内容は、当時公害問題が極めて重大な社会問題になっていた頃、多摩川を重点的に良くし、全国の都市河川の抱える問題、特に水質浄化対策を総合的に実施する事によって、そのモデルにしようとする試みでもあった。東京都は、この計画に総事業費4100億円(昭和45年当時)をかけ、10年間で、昭和35年頃の多摩川の水質まで戻そうとするのが、その内容である。

多摩川シリーズの編集班は、この計画の実施完了年である昭和55年3月まで、この計画がどのように実施され、目標をどこまで遂行できたかを追

跡し特集した。そして、この計画に直接・間接に関与された方々4名に原稿を依頼し、この問題について論じていただいた。原稿執筆者は以下の通りである。

「多摩川水質浄化の問題点と課題」東京都公害研究所 川原浩一、「流域下水道の神話」科学ジャーナリスト 加藤迪、「多摩川水質の経年変化と今後の方向」東京大学工学部 市川新、「多摩川流域圏構想を」とうきゅう環境浄化財団 涌井雅之

又、資料編は、東京都による河川水質の汚濁防止対策を、昭和37年の東京都長期計画から、昭和56年、東京都総合実施計画にいたる10編の計画内容について抜粋し収録した。これら資料編は都合上、二部に分け編集しました。

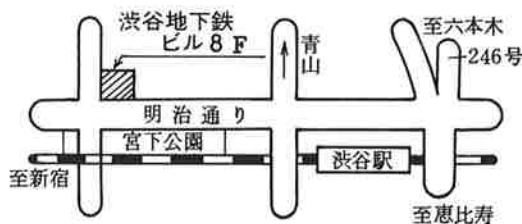
尚、多摩川'81を入手希望の方は、財団事務局までお問い合わせ下さい。

### 〈多摩川雑感〉

多摩川の夏は、六月初のアユの解禁からはじまる。先日、ある釣り雑誌を読んでいたら、多摩川のアユ釣りの隠れた穴場という投稿があった。それによると、多摩川のアユの好漁場は、秋川、本川上流部が一般的であるが、二子橋、玉堤、登戸あたりで、かなり成育のよいものが釣れるということであった。このアユが、天然そ上したものか放流されたものかはっきりしないが、ここ数年、

調布堰から下流部の感潮水域の水質が、一時期に比べるとずいぶん良くなった。その意味で、海からの天然アユのそ上が復活していることも否定できない。今年のアユ解禁日は、多摩川漁協(秋川、拝島橋より下流)が6月1日、秋川漁協(秋川)が6月14日、多摩川漁協(本川拝島橋より上流)が6月21日になっている。そして、今年の放流数は、すでに200万尾に達している。

- 発行日 昭和56年6月1日
- 編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団  
〒150 渋谷区渋谷1-16-14  
(渋谷地下鉄ビル内)  
TEL (03)400-9142



\*印刷所 雄文社 〒336 浦和市常盤9-11-1  
TEL (0488)31-8125